

当院の過去三年間の産科統計と里帰り分娩について

樋口 朗¹⁾・川田 信昭¹⁾

はじめに

昭和55年9月1日から、昭和58年8月31日までの過去3年間における村上病院の産科統計を出してみたが、その際、当地に里帰り分娩が意外に多いことを知った。そこで、それについてもまとめ、産科統計と併せて報告したいと思う。

I：調査対象

昭和55年9月1日から昭和58年8月31日までの過去3年間に、当院にて取扱った1863件の分娩を対象とした。

II：我が国の出生率、村上保健所管内の分娩件数、及び当院の分娩件数の推移。

我が国の出生率（人口千対）は、昭和55年が11.9、昭和56年が12.9、昭和57年が11.3で、それに対応するように、当保健所管内の分娩件数も、昭和55年1,063件、昭和56年1,068件、昭和57年1,009件と漸減傾向となっている。これに反し、当院取扱分娩件数は、最近の病院指向傾向を反映してか若干の増加傾向を示している。

III：産科統計結果とその考案

a) 児の男女比

総分娩件数1,863件中男979件（52.5%）、女884件（47.5%）であった。

b) 年齢別出産分布

表1の如く、20代の出産が全体の63%を占めている。10代の出産は6件で、うち18才2件、19才4件であった。高年初産は59件で、全体の3%となっていた。また最高出産婦年齢は37才である。

c) 分娩歴別出産分布

表2の如く、第2子までの出産が83%を占め、第3子以上の出産は17%と減少している。

d) 妊娠週数別出産分布

表1 出産年齢分布（総分娩数）

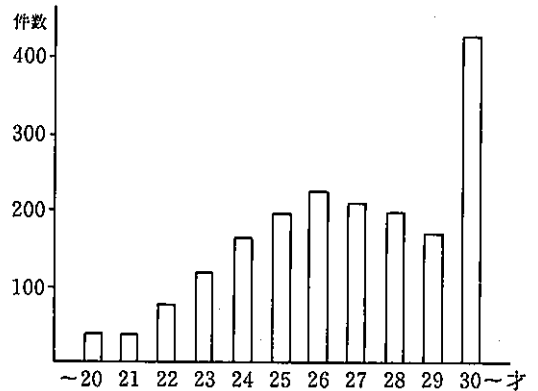


表2 分娩歴

	当院総分娩件数		里帰り分娩件数	
初産	820名	44%	253名	59%
1 経	727	39%	162	38%
2 経	279	15%	16	3%
3 経	37	2%	0	

表3 分娩週数

weeks	当院総分娩件数		里帰り分娩件数	
~32	12名	%	2名	%
33~37	106	6%	17	4%
38~42	1597	86%	368	85%
42~	148	8%	44	10%

表3の如く、満期産が1,597件で86%を占めている。32週以前の早産は12件で、うち3件が大学NICU移送となり、3例ともその後の経過は順調であった。

e) 生下時体重分布

表4の如く、低出生体重児（2,500g未満）は

¹⁾村上病院産婦人科

表4 生下時体重分布

	当院分娩総数 1863		里帰り分娩 431	
～2000g	19名	1%	2名	0.5%
2001～2500	56	3%	6	1.5%
2501～3000	410	22%	99	23%
3001～3500	894	48%	228	53%
3501～8000	391	21%	78	18%
4001～	93	5%	17	4%

表5 合併症

	当院総分娩件数		里 帰 り	
貧 血	708名	38.0%	68名	15.8%
中 毒 症	156	8.4%	31	7.2%
流 早 産	108	5.8%	32	7.4%
前 期 破 水	63	3.4%	8	1.8%

4%で、巨大児(4,000g以上)は5%であった。
f) 合併症について(表5)

中毒症は1962年の日本産婦人科学会妊娠中毒症委員会の分類に従い、収縮期圧140mmHg以上、蛋白尿30mg/dl以上及び浮腫のいずれか少なくとも1つ以上が、2回連続して認められたものを採った。

妊婦貧血はW. H. O. の定義より、Hb. 11.0g/dl未滿とし、造血剤の投与を受けたものを採った。

また、前期破水は破水後分娩まで24時間以上経過し、かつ前期破水として入院管理されたものを採った。

i) 貧 血

古谷の全国統計では、初産婦31.3%、経産婦31.8%と報告されているが、当院では、38%とより高頻度であった。

ii) 妊娠中毒症について

8.4%の頻度であるが、これを他の施設と比較すると、信州大北村の8.7%、東大分院の7.8%とほぼ同頻度であるが、同じく信大北村による東日本12施設の6.2%、西日本11施設の5.2%よりは若干高かった。

表6 骨 盤 位

105/1863 (5.6%)
自然分娩 65例
帝王切開術 40例

g) 骨盤位について

表6の如く、105件で全体の5.6%であった。これは、市村の3.9%、柿本の4.3%に比しやや高くなっているが、当院では外回転術による積極的治療はせず、矯正運動指導のみであることも一因であるかも知れない。

骨盤位の帝切件数は40件で、骨盤位帝切率は38%であった。これは市村の11.2%、町田の9.1%、T. O. Gの29.3%に比し、やや高くなっている。

h) 分娩様式

表7の如くで、当院では鉗子分娩は施行していない。帝切率は4.4%で、森の3.9%、三谷・中島の2.74%、聖マリアンナ医大・石井の5.5%、T. O. Gの6.7%等に比較して、標準的な値と考えられる。

表7 分娩様式

	当院総分娩件数	里 帰 り 分 娩
自然経産分娩	1538件 (82.6%)	330件 (77%)
吸引分娩	243件 (13%)	71件 (11%)
帝王切開	82件 (4.4%)	30件 (7%)

帝切の内訳は表8の如く、初産が56%で、うち高年初産が8件(8%)あった。

表8 帝切施行例の内訳

総 件 数	72件	100%
初(高)年初産	40件 (8件)	59%
経 産	34件	41%
{ 初 帝 切 { 反 復 帝 切	15件	
	19件	

(1480.9.1～1983.8.31)

帝切の適応を表9に示した。これでは同一症例で適応がダブっているものもあるため、実際の帝切数より多くなっている。

当院の過去三年間の産科統計と里帰り分娩について

表9 帝王切開術の適応

	総 数	初産婦
骨 盤 位	40	18
C. P. D.	37	35
前 期 破 水	23	16
胎 児 仮 死	26	14
分 娩 遅 延 二 期	22	13
常位胎盤早期ハク離	4	4
前 置 胎 盤	3	3
サイ脱・下垂	6	6
中 毒 症	4	0
子宮内胎児感染	2	2
高 年 初 産	8	8
子 宮 奇 形	4	3
そ の 他	6	2

反復帝切率は表10の如く32%であった。これを他の施設と比較してみると、T. O. Gの19%、川島の13.29%、三谷の5.31%等の当院に比して低いものと、植竹の37.8%、品田の45%、山本の51.9%等の当院より高い報告もあり、当院の反復帝切率は、全国的に標準的な値であると考えられた。

表11に反復帝切例の適応を示した。

表10 前回帝切例の内訳

前 回 帝 切	60 件	100 %
反 復 帝 切	19 件	32 %
経 膣	41 件	68 %

表11 反復帝切例の適応症

C. P. D.	18
前 期 破 水	5
骨 盤 位	2
子 宮 奇 形	1
中 毒 症	2
予 定 日 超 過	1

これも表9の如く、適応のダブっているものもある。

なお幸いなことに、帝切後の母体死亡は一例も経験していない。

IV：里帰り分娩について

a) 概 念

母親がお産及び産後の世話を受けられる両親の下に帰ってお産をすることであり、都会での核家族化が進む今日では、今後さらに増えていくお産様式ではないかと考えられる。

b) 頻 度

この3年間当院で取扱った里帰りの分娩件数は431件で、総分娩件数の23%も占めていた。

c) 里帰り転院時期について

表12の如く、妊娠32週以降に当院を初受診する人が、全体の97.4%を占め、残り2.6の殆んどは、妊娠初期に一度当院を受診し、分娩予約を済ませている人である。

表12 里帰り転院時期

~32	33	34	35	36	37	38	39~週	名
53	30	64	80	119	60	21	4	名
10.2	6.8	14.8	18.6	28.0	14.0	5.0		%

d) 里帰り分娩の県内外別と紹介状持参の有無について

紹介状は、妊娠経過及び検査所見等を詳細に記載しているのだから、単なる名刺の裏書きに至るものまでを含めた。

表13の如く、県内からの里帰り分娩は159件(37%)で、県外からは272件(63%)で、県外からの里帰り分娩が多かった。

表13 紹 介 状

		有	無
県 内	公 的	44 名	9 名
	私 的	49	57
県 外	公 的	61	13
	私 的	61	137

紹介状の有無無についてみると、県内からでは、紹介状有りが58%、無しが42%であるのに対し、逆に県外からでは、紹介状無しが65%と多く

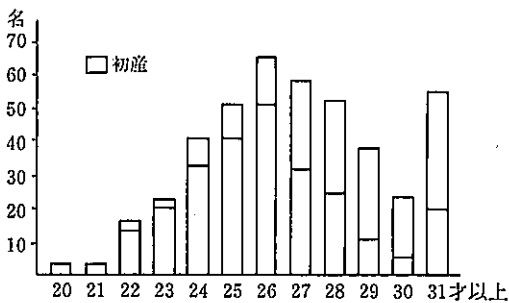
なっていた。また、紹介状無しについてみると、私的病院で妊婦検診を受けていた人が、圧倒的に多かった。

ただし県内の無しには、電話連絡によるものが若干あった。

e) 各事項の総分娩統計との比較

出産年齢分布は、表14の如く、20代の分娩が大半を占め、10代の分娩はなかった。また総分娩に比して30代の分娩が減少していた。

表14 年齢分布(里帰り分娩)



分娩歴別出産分布では、表2の如く初産が59%と著しく高くなっているが、里帰り分娩の意義からして当然のことと思われる。

妊娠週数別出産分布は、表3の如く早産・満期産・過期産の割合が、総分娩の場合とほぼ同じであった。

生下時体重分布も表4の如くで、低出生体重児

2%、巨大児4%で、総分娩の場合とほぼ同じであった。

合併症についてみると、貧血が15.8%で、総分娩例の38.0%に比して低くなっているが、これは妊婦貧血の頻度が最も高い妊娠中期を過ぎた後期からの受診が多いためと考えられる。また、流早産が総分娩例の5.8%に対し7.4%と少し高かったが、前期破水が総分娩例の3.4%に対し、1.8%と少なかった。

分娩様式では、帝王切率が全体の4.4%に対し7%と高かった。

f) 里帰り分娩で特異な経過をたどった症例。

東京から帰省直後、妊娠31週骨盤位・前期破水で当院を院受診したが、臍脱があり、不幸にも死産となった。

頸管縫縮術施行後横浜より帰省、間もなく陣痛発来し、妊娠32週で1980gの早産となった。

その他妊娠36週、37週、39週で帰省直後から陣痛発来し、飛び込み入院となった例が3件あった。

上記の症例より、里帰り分娩は妊娠後期の旅行というリスクを伴うため、医師の相互連絡が大切であると痛感された。

最後に、産科統計として周産期死亡を出せなかったことが悔やまれたが、それについては別の機会に報告したい。

参 考 文 献

- | | |
|------------------------------------------|-----------------------------------------|
| 1) 川 島 武 夫 : 産婦人科治療,
45 : 251, 1982. | 6) 吉 岡 保 : 産科と婦人科,
50 : 1948, 1983. |
| 2) 市 村 三紀夫 : 産科と婦人科,
49 : 1220, 1982. | 7) 町 田 浩 通 : 産科と婦人科,
49 : 293, 1982. |
| 3) 植 竹 泰 : 産科と婦人科,
10 : 1825, 1983. | 8) 厚生省統計協会 : 国民衛生の動向,
29 : 48, 1982. |
| 4) 北 村 文 明 : 産科と婦人科,
50 : 2090, 1983. | 9) / : / , 30 : 50, 1983. |
| 5) 紀 川 純 三 : 産婦人科治療,
48 : 91, 1984. | 10) 村上保健所 : 衛生年報, 昭和55年度号. |
| | 11) / : / , 昭和56年度号. |
| | 12) / : / , 昭和57年度号. |